

マレーシア留学で気づいたこと

薬学部 2 年 眞柄 月菜

今回、大学のスプリングセミナーで約 2 週間マレーシアに滞在した。この経験を通して私が最も強く感じたのは、「言葉が完璧でなくても、人は分かり合える」ということである。

渡航前、私は英語に対して強い不安を抱えていた。間違えたらどうしよう、伝わらなかったらどうしようと考えるうちに、自分から話しかけることを避けてしまう自分がいた。しかし現地に着いて最初に驚いたのは、周囲の人々の「受け止めようとする姿勢」だった。

特に印象に残っているのは、現地の学生と初めて会話をしたときのことである。拙い英語で必死に言葉をつなぐ私に対して、相手は急かすことなく、最後まで耳を傾け、笑顔で「わかるよ」と言ってくれた。その瞬間、うまく話せたかどうかよりも、「伝えようとしたこと」が届いたという実感が胸に残った。

それ以降、私は少しずつ自分から話しかけるようになった。完璧でなくてもいい、間違えてもいいと思えたことで、言葉に対する恐怖が和らぎ、気づけば自然に笑いながら会話を楽しんでいった。言語は壁ではなく、人と人をつなぐ手段なのだと初めて実感した。

また、マレーシアは多民族・多文化社会であり、宗教や食文化、価値観の違いが日常の中に溶け込んでいる。日本では当たり前だと思っていたことが、ここでは必ずしも当たり前ではない。その違いに触れる中で、自分の「普通」が一つの見方に過ぎないことに気づかされた。

さらに、現地で出会った人々の優しさは、言葉以上に心に残っている。食事に誘ってくれたり、さりげなく気遣ってくれたり、その一つ一つの行動が、異国にいる私の不安を和らげてくれた。そして同時に、自分も誰かに対してそうありたいと思うようになった。

この留学を通して得たものは、語学力だけではない。自分から一歩踏み出す勇気、そして違いを受け入れようとする姿勢である。今回の経験は、単なる思い出ではなく、これからの自分の行動や考え方を支える大切な軸になったと感じている。

